The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複合動詞の量的考察の結果を教育現場へ活かす方を探る ： 学術論文における使用頻度の高い複合動詞を試みとして
Author(s)	高, 娟
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 192-203
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

複合動詞の量的考察の結果を教育現場へ活かす方を探る*
―学術論文における使用頻度の高い複合動詞を試みとして―

高　娟

1　はじめに

日本語学習者にとっては、「動詞の連用形＋動詞」という形式の複合動詞は習得が困難な項目である（森田 1978、松田 2004、陳 2010）。

その習得の難しさの要因に関しては、複合動詞の多義性が高い、前項動詞と後項動詞の結合条件が不透明である、単純動詞との意味の区別が困難である、など複合動詞そのものの特徴に関わる要因もあれば、辞書の記述の不十分さ、教育現場での導入方法や教科書での扱い方の問題など複合動詞を習得する学習環境に関わる要因もあると指摘されている（畠山 2008、曹 2011）。

複合動詞習得上の問題点を解決するには、学習者や日本語母語話者の使用実態（張 2009、2010，陳 2007、2008、2010，高 2014）や、後項動詞の使用傾向（村田・山崎 2012，村田 2008、2013、2016）など量的考察に焦点が当てられ、一連の研究が行われてきた。

その中で、高（2014）は、日本語母語話者による紙媒体の学術論文 30 本を電子テキスト化し、総文字数が 416,317 語の学術論文コーパス（以下 :「自作コーパス」と称する）を作成した。その後、自作コーパスの中から複合動詞のデータを抽出し、複合動詞の一覧表と例文集を作成し、学術論文における母語話者による複合動詞の使用状況を考察した。

本稿では、高（2014）の研究結果の一部を踏まえ、日本語母語話者による使用頻度の高い複合動詞を日本語教育の現場でどのように扱うかについて考察することを試みる。

2　先行研究とその問題点

複合動詞に関する量的研究は、コーパスやデータベースを利用して調査を行うのが一般的である。大別すると、日本語母語話者の複合動詞の使用実態についての研究（高 2014，張 2009、2010，入戸野ほか 2009、2010，松田 2004，村田ほか 2012，村田 2013、2016，畠山衛 2008）、日本語学習者の複合動詞の使用実態を調査する研究（高 2018，陳 2010）、母語話者と学習者の複合動詞の使用実態を比較しながら調べる研究（陳 2007、2008）などに分けられる。そのうち、母語話者の複合動詞の使用実態に関する研究が多くを占める。

2.1　日本語母語話者の複合動詞の使用状況についての量的考察

日本語母語話者の複合動詞の使用実態については、母語話者による複合動詞の使用状況（高 2014，張 2009、2010，陳 2008，畠山衛 2008）や、使用頻度の高い複合動詞の前項動

詞（高 2014，張 2009、2010，陳 2008，畠山衛 2008）や、使用頻度の高い複合動詞の後項動詞（高 2014，張 2009、2010，陳 2007、2008，入戸野ほか 2009、2010，松田 2004，村田ほか 2012，村田 2013、2016，畠山衛 2008）などの量的考察がある。

母語話者についての量的研究を行う動機としては、日本語学習者にとっては複合動詞の見出し語を一つ一つ暗記するのが認知的に非現実的であるために、母語話者の使用傾向や母語話者の使用上位項目を考察することを通じて、学習語彙を選択し、学習者が当面目標とする複合動詞を知らせる必要があるためと考えられる。

また、複合動詞は語彙としてより複雑な内容を表す語である（田中 2004）。よって日本語学習者には、複合動詞の理解と使用との間に大きなギャップがある。ゆえに、単独の語彙として教えるのではなく、学習者が具体的な文脈の中でそれを選択する理由を明確に意識した上で使用できるようにする必要がある（村岡 2008）。

しかしながら、これまでの母語話者による複合動詞の量的考察は、複合動詞の使用頻度上位項目や前項動詞別・後項動詞別の使用頻度などの考察に偏っている。また、せっかく抽出された複合動詞のデータを、即ち、量的考察の結果をどのように複合動詞の現場指導に応用していくのかについてはほとんど明らかにされていない。

2.2　高（2014）について

高（2014）は、学術論文コーパスを利用し、母語話者による複合動詞の使用状況を量的に考察した。その研究結果の一部は、以下となる。

まず、青空文庫について調査した畠山（2008）の研究結果と比較した。その結果、文学作品における高頻度複合動詞と比べ、学術論文によく使われる複合動詞は限られていると述べている。

次に、学術論文の場面において最上位項目の複合動詞は一つの意味に集中して使用される傾向が見られ、語彙の使用場面によって意味や使い方が定着していることがわかった。

最後に、学術論文における頻出複合動詞の最上位 20 項目を同定している。抽出された複合動詞の 49％が、この最上位 20 項目に集中していることから、学術論文を作成する際に母語話者によく使用される語彙だと考えられる。

前述したように、高（2014）は自作コーパスを利用し、複合動詞について考察したものである。自作コーパスを採用する研究方法に関しては、含まれる言語項目が少ないことや抽出されたデータの妥当性などが問題として挙げられる。また、高（2014）も母語話者による学術論文の中でよく使用されている複合動詞を量的に考察したが、その結果をどのように応用するかについては明確にしていない。

3　研究目的と考察対象

3.1　研究目的

本稿の研究目的は二つある。一つは、調査を通して、高（2014）の研究結果の一部を再検証することである。

学術論文の使用場面において、最上位項目の複合動詞は一つの意味に集中して使用される傾向が見られたという研究結果に関して、母語話者にとって多義性の高い複合動詞の意味がどの程度馴染み深く感じられるかをもう一度検証する必要があると考えられる。

また、もう一つの研究目的は、最上位項目に焦点を当てて、学術論文における使用頻度の高い複合動詞をいかに複合動詞の教育現場での指導へ応用するかについて考察することである。

学術論文によく使われる複合動詞は限られているという研究結果に関しては、その結果を学術論文を書く必要がある学習者に提示することで、複合動詞の指導として効果的だと考えられる。

3.2　考察対象

本稿は高（2014）の研究結果の一部、即ち複合動詞の上位項目 10 項目を考察対象とする。自作コーパスから抽出された複合動詞の上位 10 項目は、全て語彙的複合動詞である。その延べ語数は 208 語で、総複合動詞延べ語数 608 語に対して 34%を占めている。

表 1　複合動詞の上位 10 項目

順位	複合動詞	延べ語数	割合	順位	複合動詞	延べ語数	割合
1	取り上げる	28	4.6%	6	言い換える	17	2.8%
2	見なす	28	4.6%	7	受け入れる	16	2.6%
3	繰り返す	28	4.6%	8	結び付く	16	2.6%
4	取り入れる	24	3.9%	9	取り組む	15	2.5%
5	話し合う	24	3.9%	10	生み出す	12	2.0%
上位 10 項目の延べ語数：208/608　(34.1%)							

4　研究課題

本稿では、以下の研究課題を設定する。

研究課題 1 ：自作コーパスにおける複合動詞の例文データと対照しながら、考察対象の「語彙の意味」について考察すること。

研究課題 2：文脈での最上位項目の使用パターンについて考察すること。

課題 1 を通して最上位項目の意味を検証することができ、課題 2 を通して最上位項目の教育現場での指導への応用を把握できると考えられる。課題 1 と課題 2 を通して、学

術論文における使用頻度の高い複合動詞の教育現場への応用に着目する。

5　考察とその分析

この節では、本稿の研究課題に関する考察を記述する。最上位 10 項目を考察対象とするが、紙幅の都合上、5.1 では「取り上げる」、「見なす」、「繰り返す」を、5.2 では「取り上げる」を例として取り上げ、詳しく述べることにする。

5.1　研究課題 1 について

複合動詞の単語親密度を調べ、母語話者による最上位項目の意味の認知度を考察する。

5.1.1　単語親密度とは

単語親密度とは、母語話者にとっては単語がどの程度なじみ深く感じられるかを表す指標で、単語の認知に深く関わっている。単語の親密度を表す数値は複数の認定者が単語のなじみの程度を評定した時の平均値である。単語親密度が高い単語ほど、認知に必要な時間が短く、かつ認知の誤りが少ない。

『基本語データベースー語義別単語親密度』（学習研究社 2008）は言語学・心理学など様々な分野で利用されている。これにより、日本語語彙の語義単位の親密度データが検索でき、言葉の意味に関する科学的基礎データである。

本稿では、『基本語データベースー語義別単語親密度』（以下：「基本語データベース」と略称）を利用し、考察対象の複合動詞の単語親密度を考察する。

5.1.2　「取り上げる」「見なす」「繰り返す」の単語親密度について

１）「取り上げる」

まず、学術論文における「取り上げる」の意味を見てみる。下記の文例は、自作コーパスにおける複合動詞の例文集から取り出されたものである。

文例 1）　この(13b)に対する指摘は本稿で取り上げる文の自然さを考える上で重要である。（データ番号：D.NO－229）

文例 2）　…、ほかの生徒の発話を引用しながら自分自身の発話(科学的概念)を構築していく発話をとりあげている。（D.NO－498）

文例 3）　本稿で取り上げる問題は日中両言語における自他のズレという観点から中川(2005)などに記述があるが、…。（D.NO－122）

文例 4）　…、引用動詞だけを取り上げて論じていては見えなかった引用動詞に補助動詞を伴った形、…。（D.NO－235）

上述の文例における「取り上げる」はテーマ化を行う時に用いられ、「問題として扱う」や「テーマとして採用する」という意味である。「取り上げる」を含む例文は全部で 28 例であるが、ここでは文例 4 例を挙げた。残りの 24 例を分析した結果、同様に、「取り上げる」の意味は「問題として扱う」という意味に集中して使用される傾向があることがわかった。

次に、『基本語データベース』には、「取り上げる」の意味についての解釈が 5 つ提示されている。

表 2　「取り上げる」の単語親密度

NO	語義文	単語親密度	学術論文
1	下に置いてある物を手に取って持つ。	3.950	
2	下の人の意見や案などを聞き入れる。採用する。受け付ける。	4.500	
3	力や権力などで無理矢理取る。没収する。	4.950	
4	特に取り立てて問題とする。問題として扱う。	5.150	●
5	手を貸して子を産ませる。	2.875	

そのうち、「特に取り立てて問題とする。問題として扱う。」という意味の単語親密度は「5.150」で、最も高い。即ち、母語話者に「取り上げる」という語彙を提示すれば、「特に取り立てて問題とする。問題として扱う。」という意味が最も認知されやすいと言える。

すなわち、学術論文における「取り上げる」の意味は、『基本語データベース』における「取り上げる」の単語親密度の最上位の意味と一致している。

2)「みなす」

「みなす」は、「見る」と「做す」で構成される複合動詞というより、一語として固定化していると認識される語彙的複合動詞である。自作コーパスにおける「見なす」の意味については、次の文例 5 と 6 の中で使用されているように、「判断したり仮定したりして、そうだと決める」という意味で使用されている。

文例 5）…、単一メカニズムモデルはボトムアップ的なモデルであると$\boxed{\text{みなす}}$ことが出来る。（D.NO－19）

文例 6）…、ここでは便宜的に 2 級レベルの学習者の漢字知識における 2 級から 4 級の出現漢字のカバー率を 100％と$\boxed{\text{見なす}}$。（D.NO－30）

文例 5 では「見て、それと判定する」の意味で、文例 6 では「仮定する」の意味である。自作コーパスの複合動詞例文集では、「みなす」を含む例文は合わせて 28 例であるが、全ては「判断したり仮定したりして、そうだと決める」という意味で使用されている。

『基本語データベース』における「みなす」の意味について考察したところ、「見て、それと判定する。そのようだと決める。」という意味の単語親密度が最も高い。続いては「見て、仮にそのようだと考える。仮定する。」という意味である。

表 3　「見なす」の単語親密度

NO	語義文	単語親密度	学術論文
1	見て、それと判定する。そのようだと決める。	5.475	●
2	見て、仮にそのようだと考える。仮定する。	5.250	●
3	法律の上で、性質が異なる 2 つの物事を同じと考えて、一方の法律効果を他方にも生じさせる。	3.600	

上述の分析から、「みなす」については母語話者にとって認知度の高い意味が、学術論文でも使用されていることが見られる。

3)「繰り返す」

「繰り返す」は一語として固定化していると認識される語彙的複合動詞である。自作コーパスの複合動詞例文集においては、「繰り返す」が「同じことを何度もする」という意味で使用されている（文例 7 と文例 8）。

文例 7）…、これを繰り返して前期には計 3 回の作文を書かせた。（D.NO－368）

文例 8）…、特定のトピック展開を繰り返しながら進む「循環型(circular)」であると指摘した(1992：67,74)。（D.NO－472）

『基本語データベース』における「繰り返す」についての解釈の中では、「また同じことをする。反復する。」という意味の単語親密度が最も高い。

表 4　「繰り返す」について

NO	語義文	単語親密度	学術論文
1	また同じことをする。反復する。	5.825	●
2	もう一度言う、または書く。	5.675	

このことから、学術論文に使用されている意味が母語話者にとっては認知度の高い意味であることが見られる。

また、複合動詞例文集の中には、「繰り返す」の活用形「繰り返し」を多用する文例がある。「反復に動作を行う」という意味を表し、後ろの動詞の動作を修飾する（文例 9）。

文例 9）…、3・4 級レベルの漢字が繰り返し出現していることが推測される。（D.NO－197）

「繰り返し」の単語親密度を調べると、「繰り返すこと。反復」という意味を表し、母語話者による単語親密度が「6.125」である。

表 5　「繰り返し」について

NO	語義文	単語親密度	学術論文
1	繰り返すこと。反復。	6.125	●

それに対して、同じ意味を表す「繰り返す」の単語親密度は「5.825」である。よって、学術論文の中で「反復」の意味を表すとき、「～を繰り返す」という形のほかに、「繰り返し～する」という形式も母語話者によく認知されるということである。

上述の内容では、総合順位 1 位から 3 位までの複合動詞「取り上げる」「見做す」「繰り返す」を取り上げて、学術論文に使用される文例を挙げながら、各語の単語親密度について考察した。このような分析方法に従って、残りの複合動詞 7 項目について考察を行い、その結果としては「受け入れる」以外は、学術論文で使用される意味と単語親密度の最上位の意味と一致していることが見られる。

総括すると、学術論文で母語話者によく使用される複合動詞の意味が、単語親密度の最上位の意味であることが言える。このことから、高（2014）の研究結果の一部を再検証することができる。

5.2　研究課題 2 について

複合動詞の教育現場への応用を考え、複合動詞の導入方法や教科書での扱い方の問題を考察する必要がある。本稿では、まず、複合動詞のテキストでの扱われ方を調べ、どんな問題点があるかを把握し、現場教育への応用を考察する。

5.2.1　テキストでの扱われ方

日本語学習の教科書では、「統語的複合動詞」は文法項目として、「語彙的複合動詞」は

語彙として取り入れられているのが一般的である。

ここで「取り上げる」を例として、複合動詞の教科書での扱われ方について考察する。中国の大学でよく使用されている日本語を精読する教科書における「取り上げる」の語彙解釈について考察を行った結果、いくつかの問題点を発見した。

表 6　教科書での「取り上げる」の扱われ方

「取り上げる」の解釈	出典
取り上げる<他一>⓪④　拿起；采纳；剥夺；没收；提出；	『新編日語』Ⅲ
取り上げる（とりあげる）⓪④　〔他一〕受理；采纳；	『中級日語精読』下
とりあげる⓪④〔他一〕夺走；没收；	『日語精読』Ⅲ

「取り上げる」は語彙的複合動詞で、表 6 で示しているように、基本的に「読み方、他動詞か自動詞か、アクセント、中国語の意味の解釈」というパターンで載せられている。母語話者の認知度の高い「問題として扱う」（中国語訳：提出、报道）という意味が優先的に提示されていない。複合動詞の意味の多義性が高いという要因によって、学習者が意味理解に支障をきたしていることによる誤用例が少なくない（高 2018）。

そのほかに、論文を作成するには母語話者によく使用される語彙であることや、語彙の活用形など文脈に応じた使い方については、詳しく提示されていない。

5.2.2　文脈での応用についての考察

上述のテキスト上の問題点を解決するには、母語話者の使用頻度の高い複合動詞の文脈における使用パターンを把握することが、複合動詞の指導方法としては効果的だと考えられる。本稿では、NINJAL－LWP for BCCWJ（以下、「NLB」と略称）を利用して考察する。

NLB は、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を検索するための検索システムである。名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示でき、言語学や日本語教育など様々な分野で利用されている。この調査により、書き言葉における複合動詞の格形式や共起表現を詳しく調べることができる。

ここで、最も使用頻度の高い複合動詞の一つである「取り上げる」を例として詳しく説明する。

「取り上げる」をパターン頻度順で検索し、文脈における「取り上げる」の使用パターンを頻度順で表示させた。表 7 の左側の表で示すように、「…を取り上げる」「取り上げれる」「取り上げる⇒動詞」「…で取り上げる」「取り上げた」という頻度順で並べられている。

表 7　NLB の「取り上げる」の検索結果

パターン頻度順	
パターン	頻度
①…を取り上げる	2,050
②取り上げれる	1,026
③取り上げる⇒動詞	830
④…で取り上げる	826
⑤取り上げた	772

パターン	コロケーション	頻度
①…を取り上げる	問題を取り上げる	218
	受話器を取り上げる	58
②取り上げれる	取り上げられる	1,023
	取り上げれる	3
③取り上げる⇒動詞	する	135
	なる	75
④…で取り上げる	ここで取り上げる	95
	なかで取り上げる	49
⑤取り上げた	取り上げた	772

「取り上げる」のパターンをさらに絞って検索し、コロケーションを頻度順に表示させた。例えば、順位 1 位の「…を取り上げる」というパターンを検索すると、「問題を取り上げる」「受話器を取り上げる」……などのコロケーションが頻度順に表示される。これにより、書き言葉の文脈における「取り上げる」の使用パターンやコロケーションなどを網羅的に調査することができる。

表 8　考察対象 10 項目の文脈での応用

NO	複合動詞	文脈での使い方
1	取り上げる	～として取り上げる・取り上げられる・取り上げようとする；
2	見なす	～とみなされる・～とみなすことができる・～を～とみなす；
3	繰り返す	同じことを繰り返す・～を繰り返して動詞・～が繰り返される；
4	取り入れる	～を取り入れる・～的に取り入れる・～を取り入れるようにする；
5	話し合う	～を話し合う・～的に話し合う・副詞＋話し合う；
6	言い換える	言い換えると・言い換えれば・～と言い換えることができる；
7	受け入れる	～的に / 素直に / すんなり受け入れる・受け入れようとする；
8	結び付く	～的に / 密接に結びつく・～ことと結びつく・～と結びついている；
9	取り組む	～的に / 真剣に～問題 / ～活動に取り組む・取り込もうとする；
10	生み出す	価値 / 利益 / 効果を生み出す・～が生み出される；

表 7 では、「②取り上げれる」というパターンには「取り上げれる」と「取り上げられ

る」があるが、「取り上げられる」の頻度数は「取り上げれる」のそれと比べて圧倒的に多い。そのため、文脈における「取り上げる」のパターンとして「取り上げられる」を採用することにする。

このような操作方法で考察対象 10 項目を調べ、その文脈での応用をまとめたものが表 8 となる。これらを学術論文を書く必要な学習者に提示することで、高い学習効果を得られると考えられる。

6. 終わりに

本稿では、自作コーパスにおける文例と対照することを通して、学術論文の中で母語話者によく使用される複合動詞の意味が、10 項目の単語親密度リストの最上位意味であることが分かった。高（2014）の研究結果の一部を再検証することができた。このことにより、学術論文における複合動詞は、一般的に最も親密度が高い意味として使われるということになる。日本語教育への応用を考えた場合、この 10 項目を学習語彙として指導する時、最も親密度が高い意味を教えておけば､それによって学術論文を書く場合にも対応できる。すなわち、学術論文の読み書きのためにわざわざ特殊な意味を覚える必要はないと考えられる。

また、テキストにおける複合動詞の語彙解釈については、語彙の記述が不十分なことや意味の提示が母語話者の認識度とズレがあることなど、複合動詞を習得する学習環境の問題点が発見できた。そこで､「文脈での使用パターン」という視点から考察対象の複合動詞 10 項目について考察を行った。この結果を学習者に提示することにより、母語話者による多用される複合動詞の教育現場への導入が可能となる。

今後の課題としては、NLB の結果に基づいて、それが正しく反映された共起関係を含む用例を教科書が挙げているかを確認する必要があること、また、教育現場への導入方法をより具体的に考察することが挙げられる。

*本稿は、「大阪大学言語文化学会第 54 回大会」（日本・大阪大学 2018 年 10 月 27 日）の口頭発表に基づいて加筆・修正したものである。

使用テキスト・資料

『新編日語』III　上海外語教育出版社（2011）
『中級日語精読』（下）　南開大学出版社（2011）
『日語精読』III　外語教育与研究出版社（2008）

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版
影山太郎・由本陽子（1997）『語形成と概念構造』研究社
影山太郎（2012）「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い」『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房　pp.3-45
高娟（2014）「日本語教育学の学術論文における複合動詞の使用実態に関する一考察」『日本語・日本文化研究』24　大阪大学大学院言語文化研究科　pp.104-114
高娟（2018）「作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析」『日本語・日本文化研究』28　大阪大学大学院言語文化研究科　pp.64-71
曹大峰（2011）「日语教材中复合动词及其教学方略研究」『日语学习与研究』3 对外经济贸易大学　pp.9-14
武田明子（2010）「科学技術専門書読解のための複合動詞の分析と考察」『東京国際大学論叢—経済学部編』42　東京国際大学　pp.127-148
田中衛子（2004）「類義複合動詞の用法一考—日本語教育の視点から」『言語と文化』10　愛知大学語学教育研究室　pp.63-79
張威（2009）「中学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析—第二言語習得ストラテジーの改善をめざして」『異文化としての日本』名古屋大学大学院国際言語文化研究科　pp.123-132
張威（2010）「高校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析—第二言語習得ストラテジーの改善をめざして」『岩大語文』第 15 号　岩手大学語文学会　pp.73-89
陳曦（2007）「学習者と母語話者における日本語複合動詞の使用状況の比較—コーパスによるアプローチ」『日本語科学』22　国立国語研究所　pp.79-99
陳曦（2008）『第二言語としての日本語複合動詞の習得』中国社会科学出版社
陳曦（2010）「第二言語としての二種類の複合動詞の習得—コーパスによる学習者の使用実態調査をもとに」『ことばの科学』23　名古屋大学言語文化研究会　pp.19-35
入戸野修・武田明子（2009）「科学技術専門書に常用される複合動詞の調査分析」『福島大学地域創造』第 21 巻第 1 号　福島大学地域創造支援センター　pp.128-147
入戸野修・武田明子（2010）「理工系分野で学ぶ基礎的な複合動詞の効果的な学習方法について」『福島大学地域創造』第 21 巻第 2 号　福島大学地域創造支援センター　pp.46-60
畠山衛（2008）「『茶漉し』による書き言葉の中の複合動詞の分析」『15th Princeton Japanese Pedagogy Forum Columbia University』Princeton Japanese Pedagogy Forum Columbia University　pp.19-33
姫野昌子（1975）「複合動詞・「～つく」と「～つける」」『日本語学校論集』2　東京外国語大学附属日本語学校
松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通じて』ひつじ書房

村岡貴子（2008）「専門日本語教育における語彙指導の課題」『日本語学』27－10　明治書院　pp.60-69

村田年（2008）「文章と複合動詞—論述文ジャンルを特徴づける新たな指標を探して—」『日本語と日本語教育』36　慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター　pp.1-33

村田年・山崎誠（2012）「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として」『日本語と日本語教育』40　慶應義塾大学日本語・日本文化教育センタ　pp.83-112

村田年（2013）「社会科学系書籍における複動動詞の使用傾向—後項動詞を指標として」『日本語と日本語教育』41　慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター　pp.67-95

村田年（2016）「BCCWJ を用いた複合動詞使用頻度調査表の改訂：22 後項動詞を指標として」『日本語と日本語教育』44　慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター　pp.115-131

森田良行（1978）「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14　早稲田大学語学教育研究所　pp.69-86